

羽衣物語

小川未明

青空文庫

昔は、いまよりもつと、松の緑が青く、砂の色も白く、日本の景色は、美しいのでありましょう。

ちようど、いまから二千年ばかり前のことでありました。三保の松原の近くに、一人の若い舟乗りがすんでいました。ある朝のこと、東の空がやつとあかくなりはじめたころ、いつものごとく舟を出そうと、海岸をさして、家を出かけたのであります。

まだ、おちこちの森のすがたは、ほんやりとして、あたり一面の畑には、白いもやがかかっていたけれど、早起きのうぐいすや、やまばとは、もうどこかでほがらかに鳴いていました。そうして、あちらの空には、富士山が、神々しく、くつきりと浮かびあがって見えました。

これを仰ぐと、若者は、つましげにえりを正して、手を合わせながら、「どうぞ、今日も私のからだに、けが、さいなんなく、おかげで、しあわせにくらせますように。」と、いいました。

こう祈りをささげると、なんとなく心がすがすがしく、気もちもはればれとして、しぜん、ふみ出す足に力が入りました。

このとき、どこからともなく、ぷんと松のにおいがしました。いつのまにか、松原へさしかかっていたのであります。木の間から、びようびようとして見える海の色、おだやかな波のうねり……。大海原は、まだよくねむりからさめきらぬものようでした。

「おや。」といつて、若者はとつぜん、歩みをとめました。なぜなら、いくぶんもやうすれかかった前の方に、ふしぎなものが目にとまったからです。なんだか、まぶしいものが、一本の松の木の枝にかかっていました。いままで見たこともないようなものです。

「尾の長い鳥かしらん。それにしては、なんときれいな、大きな鳥だろう。」と、若者は、目をみはりました。

鳥がとまっているのなら、近づけば逃げるだろうと、ちゆうちよしつつ、若者は、じつとようすをうかがいましたが、さらに、飛び立つけはいがなかったのです。そうして、風にひらひらとゆれるのを見ると、うすい着物のようにも思われました。

「とにかく、いつて見とどけよう。」と、若者は用心しながら、一足、一足、それへ近づいたのです。

ひくくたれさがった松の枝にかかっているのは、はたして、かがやかしい、すきとおるような、女の着物でありました。はなれて見ると、まぶしい光をはなち、にじのかかったようでありました。かすみを切ったようにも思われるのでありました。

「いつたい、この着物は、だれのものであろうか。」

若者は、頭をかしげ、思案にくれました。

松原の中は、しんとして、ときどき、小鳥の鳴き声が聞こえるくらいのもので、あたりを見まわしても、まったく人のいるような気はしませんでした。

若者は、はじめて見るものだけに、さわるのが恐ろしくもあれば、また、あまりきれいなので、手をつけては悪いような気さえしましたが、ついに、もの珍しさのあまり、勇氣を出して、自分の手に取り、つくづくとながめたのでした。

「これは、人間などの着るものでない。天上高く、わしかたかが、どこからかくわえてきて、ここへかけていったものだろう。なんにせよ、またと得がたい、とうといものだ。こんな宝が手に入るとは、なんと自分自身は幸せものではないか。村の人たちに見せたら、さぞ、うらやむことだろう。」と、若者は、ほくほく、よろこびました。

その着物をおしいただいて、いまやそこを立ち去ろうとしたときであります。うしろへ

小さな足音がして、鈴をふるような、さわやかな声で、

「もし、もし。」と、呼びかけたものがありました。

おどろき、ふり向くと、若者は二度びつくりしました。なぜなら、そこには目のさめるような、美しい女の人が立っていました。

「それは、私の着物でございます。どうぞ、お返しくださいませ。」と、その美しい人はいいました。

二

その声を聞き、その姿を見て、これが、この世の人であろうかと、若者は、自分の目をうたがわずにはいられませんでした。すぐには、返す言葉も出なかったのです。

「その着物を、どうぞお返しくださいませ。」と、女は重ねていいました。

若者は、着物の持ち主がわかると、いままでの楽しかった夢が破れて、がっかりしました。またと手に入らぬ宝と思えば、なおさら惜しかったのです。

若者は、

「せつかく、私が拾わたしひろいましたものを、どうぞ、捨すてたとあきらめなされて、これを私わたしにくださいませんか。」と、頭あたまを下さげて頼たのみました。

こう聞きくと、女おんなは、ぱつちり目をみはつて、さも、たまげたというようすで、

「なんとおつしやられます。その着物きものを、どうしてあなたにさしあげられましょう。それを着きなくて、私わたしは空そらへ帰かえることができません。」と、答こたえました。

「や、や、それなら、あなたは、まさしく天女てんによでいらつしやいますか。道理どうりで、人間にんげんにしては、あまりりつぱすぎると思おもいました。」と、急きゆうに若者わかものは、ようすをあらためました。

知しらぬ人ひとから、こうして見みられるのを、さも恥はずかしげに、天女てんによは、ただうつ向むいていました。

「話はなしに聞きく天女てんによの羽衣はごろもとは、これでございませうか。」

「さようでございませう。」

たぐいなく美うつくしいと思おもうのもそのはず、天女てんによであつたかと、若者わかものの感かん動どうは、しばらくしずまりませんでした。けれど、天女てんによは、天てんにいるものとはばかり信しんじたのを、どうしてこんなところへ降おりたのであろうか、と聞きかずにはいられませんでした。

「あなたは、どうしてこんなところへお降りになったのですか？」と、若者は天女に向かつて、たずねました。

天女は、こう問われると、ためらいながら顔をあげ、

「この景色があまりみごとなものですから、つい降りてみる気になりました。」と、答えたのであります。

美しいものに見とれるのは、ひとり人間ばかりでなく、天にすむ天女も、おなじであるのを知ると、自分がきれいな羽衣をほしく思うのも、悪いことではないような気がして、若者は、そのうえともしつこく、天女に向かつて頼みました。

「ごむりのお願いかもしれませんが、このきれいな着物を、どうぞ、私におあたえくださいまし。ながく我が家の宝にしたいと思えます。」

これを聞いて、天女はあきれたのであろう。が、しばらく言葉もありませんでした。「どうしても、お許しになりませぬか。」と、若者がいうと、天女の顔には、悲しみの色がただよって、ついに口をひらきました。

「その着物を着なくては、二度と天へは帰れません。人間には役にたたぬものですが、

天女には、なくてはならぬ着物でございます。」と行って、うつむきました。

若者は、片言も聞きもらすまいと、耳をかたむけていましたが、天女が、羽衣を着なければ天に帰れぬといったので、これはなんたる自分にとつて、しあわせなことであろう。そうすれば、この美しい人を村へつれもどつて、いつまでも、とめておくことができると思つたのでした。

「そう聞けば、なおさら、この着物をお返することはできません。」

「それはまた、どうしたことでございますか。」

天女は、おどろいて顔を上げ、目をぱつちりとひらいて、若者を見ました。

「羽衣より、あなたのほうが、もつともつと美しいのであります。羽衣がなければ、天へ帰れぬとお聞きしては、あなたを、いつまでもおとめしたいばかりに、羽衣をお返しすることができなくなりました。」と、若者は正直に申しました。

天女のからだは、恐ろしさのあまりふるえ、顔色は青ざめて見えました。これを見ると、若者は、こういったのも、天女のような美しい人のそばにいたいたためであり、少しも悪い心からではないのだ。どうか、それを天女にさとつてもらいたいと思ひましたので、

「天女さま、こう申しますのも、お恥ずかしい話ながら、私はまだ、ひとり者なのでございます。もし、あなたさえご承知になつて、私の妻におなりくださるならば、あなたのために、この命もささげます。ただ、人間の身として、天上のあなたをお慕いするのは、つつしみのないことかもしれませぬけれど、美しいものを愛する心に、神も人もかわりないならば、どうぞ、私の願いをお聞き入れくださいまし。」と、ねんごろにうつたえました。

天女は、にがりけのない若者の心に感動するとともに、自分にも落ち度があつたのをさとりました。こんなことになるのも、自分の軽率からであつた。うかうかと、地上へ下りさえしなければ、何事もなかつたと、後悔しました。

三

富士山は紫色をおび、ゆつたりと長くすそを引いていました。その広いすそ野のふちを、青黒い色の海が、うねりをあげ、そして、もやのかかる松林や、白い砂の浜辺は、浮き織りの模様のように見えるので、さすがに天女も、しばらくはわれを忘れて、

見とれずにはいられませんでした。

天女は、それが、こうしてわざわいを招くとも知らず、袂をひるがえすと、さつさとくじやくの舞うように、人間のいぬのを幸いに、松原へ降りたのであります。

すると、しめった土のさわやかさ、水晶をくたくたく海の水、天女は、心いくばかりそれに親しまんものと、足にまつわる羽衣をぬいで松の枝へかけ、はだしのまま、なぎさの方へ走つたのでした。

そして、冷たい水に足をひたしながら、ささやきつつ、寄せては返すさぎ波を相手としてたわむれ、いつしか、時のたつのを忘れていたのでありました。そのうち、東の空がほんのりと赤く色づきました。それを見て、天女は、はじめて朝日の上がらぬうち、天へ帰らなければならぬと気づき、羽衣をとり、松原へ引き返したのでした。

ところが、その大事な羽衣は、いつのまにか、人間の手に入っていました。このとき、若者は、

「これほどお願いしても、まだなんともおつしやらぬのは、私の心がおわかりにならぬからでございますか。」と、悲しそうにいいました。これを聞くと天女は、

「いえ、なんで、わからぬことがございましょう。天と地とわかれていても、情けにかわ

りもなければ、また善し悪しや、喜びや悲しみにも、ちがいはないのでございますもの。
。」と、答えたのでした。

「それなら、なぜ、私の願いを聞いてはくさいませんか。」と、若者は、いきいきとした目を天女に向けました。天女はためらいながら、

「空にいる私は、まったく、地上のくらしを知らないのをございます。」といいました。
「さつき、情けにかわりはないと、おっしゃったではありませんか。」

「そう申しましたのも、あなたの真心がよくわかり、うれしく思ったからです。そう思えばこそ、なおさら、あなたを幸せにしなければなりません。まったく、この地上のくらしを知らぬ私に、なんで、あなたを幸せにすることができましよう。」

「いえ、いつしよにいてさえくだされば、それで私は満足します。またそれが、どれだけ私を力づけるかしれません。私は、山へいって薪もとってくれば、海へ出て魚もとってきます。すこしもあなたに、ご不自由をばさせません。」と、若者は、あくまで思いを通そうとしました。

あわれな天女は、なやみにたえかねてか、顔には花の色があせ、青白く、急に姿がやつれて見えました。

これを見ると、若者は、天女をいたいたしく感じたのでした。そして、なんとなく、じつとしていられなくなりました。

「天女さま、私が悪いのでごさいます。わがままをいって、あなたを苦しめて申しわけがありません。どうぞ、お許してくださいまし。」と、頭をひくくたれました。

すると、天女は、頭を上げて、

「人間は人間のつとめをはたして、とうといのであります。もし、だれでもその道をあやまるなら、どんな不幸が起ころぬともかぎりません。それゆえ、早く私を空へ返してください。」と、目に涙を浮かべていいました。

若者は、天女のどこまでもやさしく、正しいのに感心しました。そして、自分が悪かったのをさとると、こうして立っているのさえ、なんとなく気恥ずかしくなったのです。

「あなたは、天にいらして、なにをなさつていられますか。」と、若者は聞きました。

「私は、神さまにお仕えています。雲の上にて、五色の機を織ります。また、神さまのお使いで、ときどき、星の世界から星の世界へと、飛びまわることもあります。」と、天女は答えました。

若者は、ていねいに羽衣を天女の前へさし出しながら、

「どうぞ、これをお受け取りくださいまし。ついては、こんなお願いをするのも、まことにあつかましい話ですが、せつかくのお名残に、せめていつまでも、美しい、正しいあなたに、お目にかかった思い出となるような、なにかおしるしをいただきたいのですが、かなわぬ願いでございましょうか。」

「私の持ちますものは、すべて、この羽衣のように、にじやかすみを織って作ったものだけに、人間の手にわたれば、いつまでも、形となって残ったことはありません。下界にすさぶあらしや雨にさらされるなら、たちまち、破れてしまうでしょう。しかし、あなたのような正直な方には、私のおあたえたものは、いつまでも心のうちへ残り、あなたの一生を、楽しくおくらしませることができましょう。」といいました。

「まあ、それは、どんなとうとい品でございしますか。」

「いえ、形のあるものではございしません。いまも申しますように、形のあるものは、いつか、やぶれくずれるものであります。形がなくなつて、心に残るものこそ、いつまでもこわれることのない宝であります。」

「と、申します宝とは？」

「人間の考えでは、絵にすら書けない天女の舞を、ごらんに入りたいと思います。」
 こう聞くと、若者の顔は、急にはれられしくなつて、につこり笑い、
 「見たものは、この世の心配や、年を忘れると、昔話に聞いたが、まだだれも見た
 と聞かぬ天女の舞でございますか。それはありがたい。」といました。

このとき、たちまち、どこからともなく起こる笛の声、それと相和す太鼓の音、若者
 は、おもわず頭をめぐらして、その美しい音色にうっとり聞きほれました。

見れば、もう天女の姿は、空へと浮かんでいました。若者が、「あれよ。」という
 まに、天女の長い袂はひるがえつて、若者のかしらの上へたれさがり、そのはしが、
 手でとらえられそうなどころまでくると、ふたたび、まき上がる雲のように、高くはなれ
 て、音楽も急調子にはずみ、それといつしよに、しばらく、はげしく舞いくるつた
 のであるが、いつしか、しだいに高く高く、そのまま姿は遠く小さくなり、ついに、かす
 みの奥深く消え去つてしまつたのであります。

いつのまにか、美しい音楽の音もやんで、ただ、そよそよと吹く朝風のうちに、音
 樂の音が、いつまでもただよつていたのであります。

浜辺はまべの砂すなの上うえに、じつとしてすわつていた若者わかものは、やつと夢ゆめからさめたように立ち上たり、方々ほうほうを見まわしましたけれど、もうどこにも、天女てんによの姿すがたもなければ、羽衣はごろものかげもありませんでした。

そして、広々ひろびろとした海原うなばらと、青い松林まつばやしと、いつにかわからぬ富士山ふじさんがあるばかりでした。若者わかものは、その後ご、長い一生しやうたを正しく、楽しく送おくることができました。

彼は、仕事しごとにつかれたときなど、いつも大空おおぞらを仰あおいで、天女てんによを思い出だしました。すると、ふしぎや、天女てんによは雲くもの上うえから、星ほしのような目めで下界げかいを見つめて、なぐさめ、はげましてくれましたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕の通るみち」南北書園

1947（昭和22）年2月

初出：「コクミン一年生」

1946（昭和21）年2、3月

「コクミン二年生」

1946（昭和21）年4月

※表題は底本では、「羽衣物語《はごろもものがたり》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

羽衣物語

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>